

角は其頃日本橋の植木店に住んで居りました、松浦侯の屋敷を出て、其ハテ何うも判らんナ、今日は十三日ぢやナ、其方は俳人ぢや、俳人には武士の志は判るまい宗匠ゆき丈の揃つた羽織似合ましたか、へ、何うも判らない、一ツ事を繰返しながら植木店の己れが住居へ戻り、其今戻つた、女御歸り遊ばしました大層貴女今日は御寒かつたでせう、御酒の支度をして置きました、其角が座敷へ座り込み腕を組で、其ハテナ、今日は十三日ぢやナ、其方は俳人、武士の志は其方には判るまい、忝ふ御座る、ゆき丈の揃つた羽織似合ましたか、へ、ン、處は兩國、今日は十三日、其角の女房は驚ひて、女貴郎何を云ふて御在になるんで

す、氣でも狂つたんですか、其黙つて居ろ、貴様達の知る處ぢやアない、今日は十三日だナ、女貴郎暖かいもので一口如何です、其ハテナ、今日は十三日ぢやナ、と繰返し云つて居りました、今日は暮てしまひ食事も爲ませんで、蒲團を敷て貰つて横になり、床の上でも繰返して居りました、其内に勞れが出たものと見へ、スヤ／＼と睡に就きました、程なく夜が明け起て雨戸をあけて見ると、雪は綿をちぎつて投る様、女貴郎、昨夜は祿々御休みにならない様でしたネ、其今日は十三日ぢやナ、女貴郎今日は十四日ですヨ、其ウン、十四日か、矢張り十三日だ、女御てうずを御遣ひになつて、一口御飲りになつたら如何です、

處へ、〇「御免下さい、御早う御座います」と、入つて来たのは、其角の俳友で杉風に嵐雪の二人。女「サア何うぞ此方へ、嵐御在かの、女「ハイ居りますので、貴下手前共では昨日歸つて参りまして、氣が變になりました、嵐氣が變になつた、餘り植木店ばかり性だから、大方逆上たのだらう、そんなことを云つて居る女「今日は十三日だの、俳人の其方には武士の志は判るまい、忝ふ御座る、宗匠ゆき丈の揃つた羽織は似合ましたか、杯と一人言を申しまして、未だ食事も致しませんので、貴下杉風様嵐雪様の御兩方か御出です、其「イヤ是は、サア何うぞ、御早くからの御出、實は御兩公の來るのを待つて居たのだ、二人「何んだイ

植木店、深く考えごとをして居ると云ふぢやアないか、其「イヤ別に考えこともして居ない、二人「實はナ、過日の約束恰度今日は十四日だから、本所松坂町の本多孫太郎殿の百韻の會の當日故是から出懸やうと思つて來たのだ、其「然う〜悉皆忘れてしまつた、成程今日は十四日だ、未だ早いから一口やつて往う、其角嵐雪杉風の三人は鼎になつて盃の遣り取りを致して居りましたがフシ「時刻もよしご三人は、支度を致して降來る雪の中をば、本所の松坂町本多孫太郎殿方へご参りました、

日の暮方からいよいよ會を始めました、其角は椽側之處へ敷物も敷ずに腕を組で、頻りと考えごとをして居りました、然う斯うする内に雪は深々と降り來り、彼是九ツ頃ほひと覺しき時分、ドンドンドンと太鼓の音が聞る、途端にガラ／＼／＼、時ならぬ物響に驚き、何事ならんと本多孫太郎殿を始めとして、一座の人々は立上り、折しも表門の方に當りまして、獅子の吠る様な聲を張り揚げ、參〇〇御届け申す／＼、吾々は播州故き赤穂の城主淺野内匠頭の浪士、大石内藏助を始めとし四十有六名の者、今晚御隣家吉良殿の屋敷へ討入仕るに付き、此段御届け申上る、大高源吾、富森助右衛門御届けの爲に罷越したり、是を聞て寶井其角は

其『成程、今日は十三日俳人武士の志は判るまい、明日待る、其寶舟、千葉殿』と大聲を揚げた、其『其角で御座る、武は盛んで御座るナ、

我がものと思へば輕し傘の上

と詠だ、此時源吾は

師の恩や忽ち碎く厚氷

其如何で御座る子葉殿、

月雪の中や命のすて所

と其角が詠ました。

フシ『是より大高源吾忠雄が、吉良邸へ乗り込み、

大勇を振り本懐を遂げまして四十六名が、行列
 正しく芝は高輪泉岳寺へ引上げまする一條は、
 後編に詳しく申述べする。

武士道 鼓吹 義士銘々傳終

明治四拾五年四月廿七日印刷
 明治四拾五年四月廿七日發行

編輯者 東京浪花節同志會

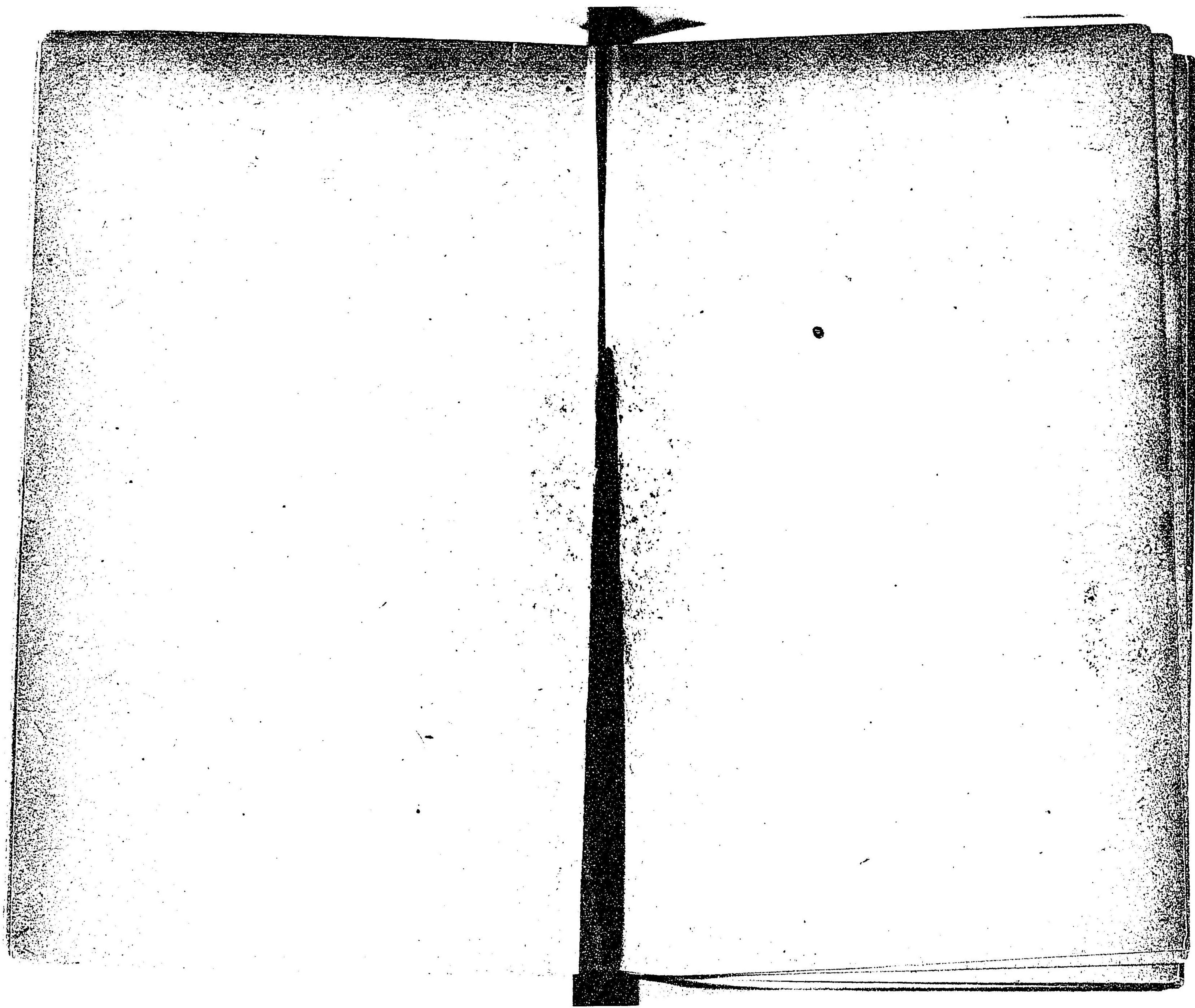
發行者 東京市下谷區仲徒町一丁目六番地 關由藏

印刷者 東京市日本橋區若松町廿一番地 井出五三九

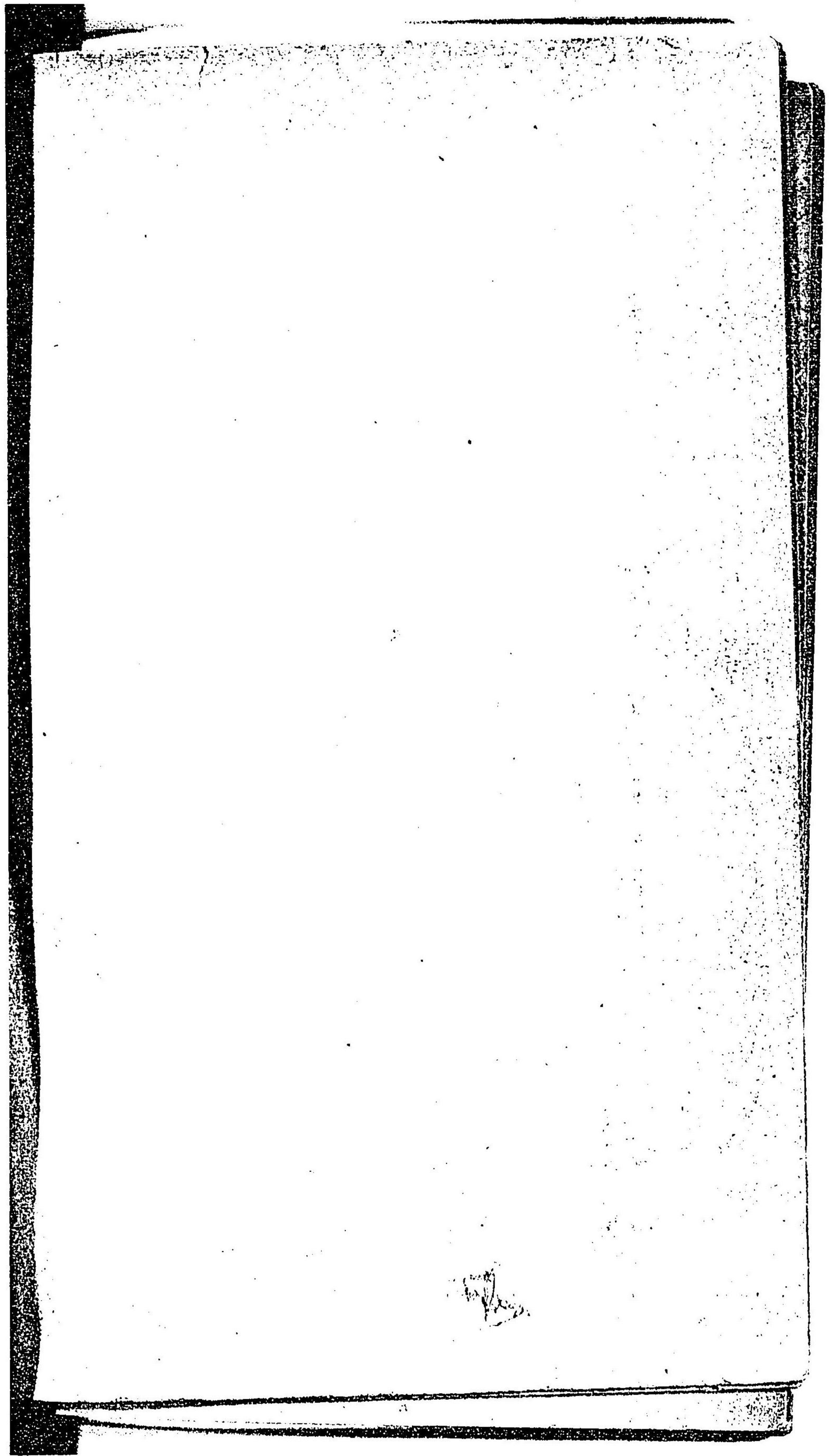
印刷所 東京市日本橋區若松町廿一番地 日進社

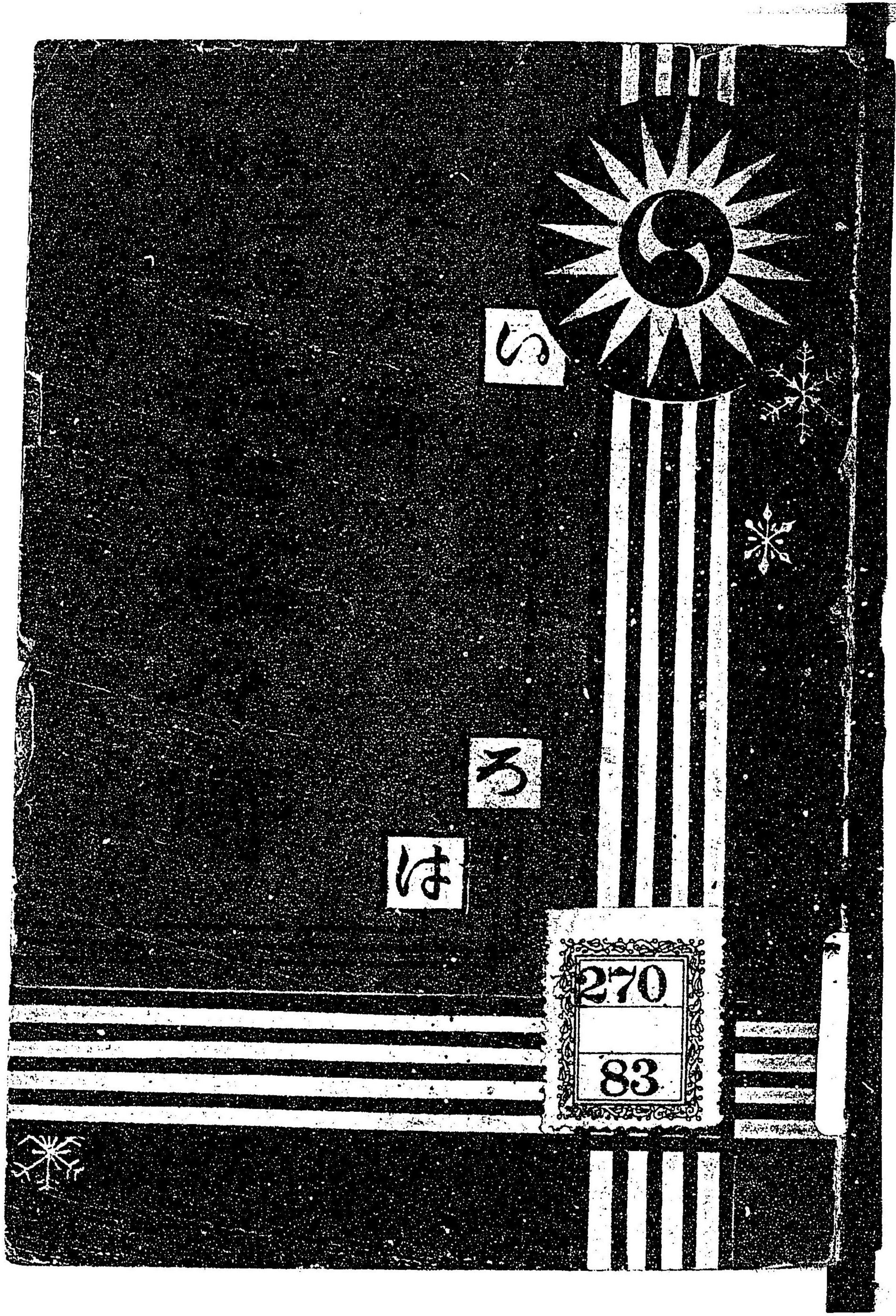


發行所 東京市下谷區仲徒町一丁目六番地 由盛閣



270
83





098191-000-3

特64-360

義士銘々伝(武士道鼓吹)

東京浪花節同志会/編

M45

DBU-0044

